編集後記：私事で恐縮ですが，息子が３人います．上から中２，小４，年長．先日，中２の長男は理科で天気の学習をしたそうです．が，天気の学習で壁にぶち当たったとのこと．どうやら覚えることの多さや計算等の難しさから苦手意識を持ってしまったようです．その後，何とか克服したようですが．長男は日頃から天気にはあまり関心無いようです．天気に左右されない部活ですし，服装もあまり気にしないタイプ．それだけの理由では無いと思いますが，少なからず日頃からの関心度合も苦手意識の要因になっていたのではと感じています．ちなみに，長男と対照的なのは次男．真冬でも半袖で過ごす意地っ張りですが，気温や天気は気になる様子．毎朝テレビの天気予報はしっかりチェックします．気象キャスターの解説にも耳を傾け「お父さん，あの低気圧がくると天気が崩れるんでしょ」など聞いてきます．親の仕事を知ってか気を遣ってくれているようにも感じます．

さて，天気予報に限らず，子どもたちに色んなことに関心をもってもらうにはどうしたらよいか日頃から家庭や教育の現場で試行錯誤されていると思います．親や学校の先生の影響は大きいと思いますが，テレビの影響も無視できないと思っています．いわゆる予報の自由化が始まった平成７年から約16年経ちました．テレビでは気象キャスターが工夫しながら解説や話題を提供していますが，リアルタイムの季節の話題や自然現象の時事に関心をもってもらうことはとても重要で，多感な子どもたちに伝わることを願っています．

先日，ある刊行物の対談記事に，最近，気象キャスターによる学校への出前授業では，防災や天気のテーマよりも環境のテーマの引き合いが多いという話が書かれていました．時勢の表れだと思います．「天気」の読者層は幅広く存在しています．読者みなさんの「天気」へ求めているニーズは違いがあると思いますが，多くの人たちに気象への関心を高めてもらいたいと思うことは一致していると思います．防災意識の向上，温暖化への認識，天気予報の精度，気象と経済の関係等々，幅広く社会や生活に密着している気象学ならではのことだと思います．「天気」に期待されることは大きいと思っていますが，できることから少しずつ実現してきたいと思います．　（田口晶彦）